

谷山文庫所蔵 和歌注釈書『にはたづみ』 解題と翻刻

大谷俊太
赤石ひろこ

一

京都女子大学図書館谷山文庫所蔵『にはたづみ』（写本、一冊、090 Ta 88 582）は、和歌一五二首・発句一句の注釈書である。書誌事項は左の通り。

縦二一・二糎、横一四・八糎の半紙本。黄土色布目紙表紙（後装）。四つ目袋綴。外題「にはたづみ 全」（中央・墨流し紙題簽・墨書・本文と別筆）。扉題「にはたづみ」（外題と同筆）。内題なし。料紙楮紙。墨付三六丁。半丁九行書。和歌一首一行書。歌頭に朱の合点、朱引きあり。本文と同筆および別筆の書入れあり。第一丁序部分の下および最終丁表奥書部分の下に「泉桂堂」の陽刻朱長方印。同奥書の「成従」とある下に扇模様陽刻朱丸印。第一丁表右下に「谷山蔵書」の陽刻朱方印。江戸後期写。

序に、

此一巻をにはたづみと名付侍る事は、西行上人の詠歌を巻頭として、八代集の内或は源氏等の秘歌どもを書頭註之

畢。於懷中可為秘藏秘書と云々

とあるように（図版1参照）、八代集や『源氏物語』など所収の和歌の注釈が収められている。『にはたづみ』については、旧蔵者谷山茂博士による「架蔵本『にはたづみ』（初出、『大阪市立大学国語国文学会会報』三六号・一九九〇年。のち、『中世和歌つれづれ 谷山茂短篇集』一九九三年・思文閣出版、に所収）の短い紹介以外、これまで言及あるを知らない。本書の奥書部分は図版2の通り。

元亀二年《辛未》卯月日書之 藤原朝臣□□

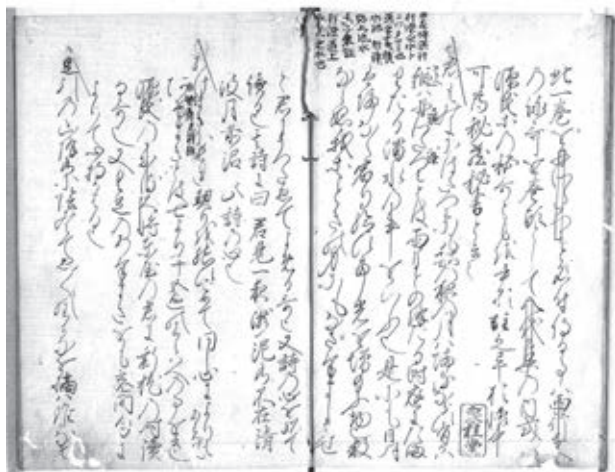
于時寛文式《壬寅》十一月吉日

三拾六枚

成従

元亀二年（一五七二）の奥書の難読の署名を、谷山博士は心眼を以て「晴右」と読まれた。晴右とは勸修寺晴右、大永三年（一五二三）生まれ、天正五年（一五七七）一月一日没、五十五歳。父は勸修寺尹豊、母は伊勢貞遠女。晴右の娘、晴子は誠仁親王の女房となり、後陽成天皇を生む。初名晴秀、天文二十四年（一五五五）権中納言、永禄十年（一五六七）晴右と改名。『にはたづみ』が書写されたとされる元亀二年には、従二位権中納言。既に中納言となつて久しい晴右が「黄門」ではなく「朝臣」と署名することに不審を覚えるが、公卿の中では他にふさわしい人物名を求め難くもある。但、後述する本書の内容からして、作者は公家であるよりは連歌師もしくは連歌好士が相応しく、もし勸修寺晴右の奥書であるとしても、作者のものではなく書写奥書と考えられる。

続けて寛文二年（一六六二）十一月の年記があり、二行分ほどの間を空けて左下に「成従」と記されているので、寛



図版 1 (本文巻頭部分)



図版 2 (奥書部分)

文二年に書写した人物と成従とは別人であろう。また、成従にも朱引きが施されているので、本書の筆者と成従とも別人と考えられよう。なお、成従を名乗る人物としては、往来物などの書家である溝口千谷（元禄九年一六九六―宝暦十年一七六〇）がいるが、蔵書印記の「泉桂堂」も含めて不詳。本書自体は江戸後期の転写本と思しい。なおなお、本書には十九箇所別筆の書入れが見られる。うち四四番歌の書入れの冒頭には「邦岡曰（く）」と記されているが、書入

れ筆者についても不詳である。

ところで、谷山文庫所蔵の書籍にはしばしば谷山博士の手になる当該書に関するメモが挟まれている。本書にも序や奥書、歌注の抄出などの九枚のメモが遺されており、その一枚に「作意不審歌抄Ⅱ天正九年（一五八一）写之」Ⅱには「たづみ」には『不審抄』にない歌がかなりある。その逆もある」との記述が見られる。上述の紹介記事には触れられていなかったが、谷山博士は本書にいま一本の伝本が伝わることを存知されていた。その『作意不審歌抄』とは、中川芳雄氏が昭和三十九年（一九六四）発行の『静岡女子短期大学研究紀要』一〇号に中川氏架蔵本の解題・翻刻を公にされたものである（天正九年写 作意不審歌抄 解題翻刻、以後、中川本と称する）。その解題に拠れば、中川本は左の如くである。

一、外題・内題ともなく、序部分に「作意不審、弁がたき哥共、思心侍り儘、百六十首書拔、注之畢」とあるところから、中川氏により「作意不審歌抄」と命名された。

一、巻末識語に「天正九年巳六月十五日 写之畢」とあり、「この本の写本年代をけざやかに物語つてゐる」。

一、序部分に「百六十首」とあるが、現状は百四十五首の注釈である。

一、藤枝白子の旧家、大塚家旧蔵である。

谷山文庫本（以後、谷山本と称する）に比べ、書写年代は中川本が断然古いと思われるが、被注歌に出入りがあり、配列も若干異なる。注釈内容は大筋は変わらないが、谷山本の方が概して分量が多く、言い回しが異なったり、別の一説、また連歌の式目に関する言及がある場合もある。しかし、逆に中川本にのみ見える記事もあり、一方から一方への単純な書承関係は成立しない。

歌の出入りについては、谷山本の百五十三首（発句一句を含む）のうち、百二十首は中川本と重なり、三十三首（発句一句を含む）は中川本には不載の歌である。即ち、中川本の百四十五首のうち、二十五首は谷山本には不載の歌であ

る。従って、二本合わせての被注歌の数は百七十八首となる。中川本の序文には「百六十首書拔注之畢」とあったが、既にその数を超えている。

なお、本書の注釈部分の文に、「前」に注したとの注記が見られるものがある。

一二八(104) 東路の道のはてなるひたち帯かごと斗りもあはんとぞ思ふ(新古今¹⁰⁵²)

此うたに同じ歌を前に注し侍る也。

しかし、「前」の注に当たるものは本書には見当たらない。従って、現存以外にも被注歌が存在した可能性もあることになる。

二

本書所収和歌の判明した出典内訳は以下の通り。

古今集(三三首)	新古今集(二四首)	夫木和歌抄(二三首)
源氏物語(九首)	後撰集(七首)	梵灯庵袖下集(七首)
千載集(四首)	続古今集(四首)	拾遺愚草(四首)
新勅撰集(三首)	金葉集(三首)	玉葉集(三首)
後鳥羽院遠島百首(二首)	秋篠月清集(二首)	松下集(二首)
拾遺集(以下、一首)	詞花集	続千載集
新後拾遺集	新後撰集	後葉集

俊頼髓腦

愚見抄

三五記

未來記

古今六帖

六花集

山家集

壬二集

金槐集

伊勢物語

平家物語

出典不明歌（一六首）

（古典ライブラリー「和歌・俳諧ライブラリー」に拠る検索結果。但、複数の出典が指摘できる場合は適宜一つに絞って掲出している）

序に言うごとく、八代集と源氏物語で八十二首になり、全体百五十三首の半分以上を占める。中では『松下集』（二首）が時代も新しく目を引くが、本文の異同が大きく、本書が正広周辺の成立とも考え難い。

本書に於ける和歌の配列については、私撰集・類題集のように四季・恋・雑の部立に分けられているわけでもなく、全体で統一した主題で揃えられているわけでもない。出典を同じくする和歌が並ぶ場合もあるが、必ずしも出典歌集別に整理されているのではない。いったい被注歌はどのように配列されているのか。

以下に、谷山本の冒頭二十六首の和歌を掲げる。注釈部分は省略し被注歌のみを配列順（漢数字）に示し、中川本の歌番号（洋数字）を括弧内に添え（中川本に不載の場合は×を付した）、和歌の下に出典注記を記した。

- 一（1）君もみよにはたづみにも秋の夜の月は隔つるならひ有かは（出典不明）
- 二（3）あげまきに長き契りを結びこめて同じ心によりもあわなん（源氏物語 総角653）

- 三 × 足引の山の降水に陰みえてゑぐのわかなを摘は誰がなぞ（出典不明）
- 四 (2) 雪消えばゑぐの若菜も摘べきに春さへはれぬ太山辺のさと（金葉三奏本9・詞花5）
- 五 × 村雨のはれ間に出ていざ摘むとがの尾山の春の若草（出典不明）
- 六 × 山鳥の尾上の茶の葉春の日にながくしくも摘み暮す哉（出典不明）
- 七 (4) いつのまに神さびぬらんかぐ山のむ杉が本は苔のむすまで（万葉261・夫木139 09・歌枕名寄2915）
- 八 × 船とむる遠かた人になくはこそあす帰りこむせなと待みよ（源氏物語 薄雲303）
- 九 × ゆきてこそあすもさねこむ中々に遠かた人は心おくと（源氏物語 薄雲304）
- 一〇 × けふよりは我をもちいのかみ草さかへさかふる陰ぞ久しき（梵灯庵袖下集5）
- 一一 × 夏の庭水ためてみむかみ草ただ咲く花の色はくれない（梵灯庵袖下集6）
- 一二 × 朝顔のあだ成花のかみ草うつしとむる名残あれかし（梵灯庵袖下集7）
- 一三 × 冬の庭月も落葉かみ草松の下ばぞしくもれる（梵灯庵袖下集8）

中川本とは二(3)と四(2)の配列が逆になるが、それ以外は同じ配列であり、谷山本ではその合間に、中川本にはない三・五・六・八の一三の和歌が加わっている。三・五・六の和歌は、四の和歌に用いられている「ゑぐの若菜」あるいは「摘む」という言葉を持つという関連で以て並べられたものと推測できる。また、一〇〜一三はいずれも「かがみ草」の和歌であり、『梵燈庵袖下集』からまとめて取り込まれたものか。さらに、一四以下、二一までは、一八番を除き『新古今集』所収歌が続く。

- 一四 (5) 萩が花まそでにかけて高円の尾上の宮にひれふるや誰 (新古今 331)
 一五 (7) 水茎の岡のくず葉も色付ぬ今朝うらかなし秋の初風 (新古今 296)
 一六 (8) 五月雨は空をぼれして時鳥時に鳴音は人もとがめず (新古今 1044)
 一七 (9) 打ちはゑてくるしき物は人めのみ忍ぶの浦の海士のたく繩 (新古今 1096)
 一八 (10) 白川のひがきのおふな年をへてみづはぐむ迄身は老にけり (後撰 1219)
 一九 (11) あしの屋の賤はた帯のかた結び心やすくも打とくる哉 (新古今 1164)
 二〇 (12) 我恋はちぎのかたそぎかたくのみゆきあわで年のつもりぬる哉 (新古今 1114)
 二一 (14) 玉柏葉しげりにけりなさみだれの葉もりの神もしめわぶる迄 (新古今 230)

一九に「かた結び」とあるところから、二〇に「かたくのみ」とある歌が導かれたのであろうし、二〇の「千木」の関連で二一の「神」「しめ」が付いていると思われる。そして、二一の「玉柏葉」以下、二六の「岩戸柏」までは「柏」の歌が並ぶ。

- 二二 (14 注) 難波江のみにうづもる、玉柏あらはれてだに人を恋ばや (千載 641)
 二三 (81) あふ事を水の柏にうらとへば沈に浮くは泪也けり (続古今 1290)
 二四 (135) いそのかみふる川野べのもと柏もとの心は朽せざりけり (古今 886)
 二五 (137) 嵐吹遠山本の村がしは誰軒端より雪はろふらん (愚見抄 20・家隆卿)
 二六 × 花の散吉野、里に賤の緒は岩と柏をふみしだきつ、(出典不明)

二三～二五は、中川本では他の箇所^二に置かれている「柏」の歌が集められる形で、ここに並べられていると言える。以上の例から、用いられている言葉が同じか縁語・連想関係によって和歌が配列されているところがあることが確認できた。このことは、二七から三一の注釈の内容を見ることがさらに確認できることになる。

二七(15) あふ事をけふ松がへの手向草^{てむかぐさ}幾世^{いくよ}しおる、袖とかもみむ(新古今 1153)

手向草とは松の事を云り。千世み草とも松也。

二八(16) ぬれてほす玉ぐしの葉の露霜に天てる光幾世^{いくよ}へぬらん(新古今 737)

玉ぐしの葉とは松の事を云也。中にも天照大神・八幡大菩薩の御愛木也。其俣神体にてまします也。

二九 × 深く入て神路の山を尋ば又上もなき嶺の松かけ(千載 1278)

神路山とは、伊勢の山田の山を云也。天照大神と申は則彼松にて侍る也。

三〇 × とへかしな玉ぐしの葉にみがくれてもすのくき目詠ならずとも(続古今 1759、下句「もすの草ぐきめぢならずとも」)

是は又榊の事也。榊をも玉ぐしの葉と云なり。うたの趣によりて替る物也。天照ひかりいく世経ぬらん

三一 × 春さればもすの草ぐきみえず共我はみやらん君があたりを(玉葉 1609)

●万葉の哥 伯勞鳥
もすの草ぐきとは、霞の事を云也。又鴈の蛙などをむばらの枝にさし置たるをも云也。時鳥のくさでとて鴈のさして置といふ。是秘する事共也。

二七と二八は注釈を見ると「手向草」も「玉ぐしの葉」もいずれも実は松の事であると言う。そして、二八の注でその松がそのまま天照大神の神体であると明かされ、その証歌として二九が取り上げられた。さらに二八では「松」の意

味であった「玉ぐしの葉」が、三〇では「櫛」のことであると別の説が紹介され、その三〇に出てくる「もずの草ぐき」が三一では「霞」を意味するとの説が述べられる。

抑、本書に於ける注釈の内容は、例えば一番歌では「にはたづみとは」、二番歌では「あげまきとは」、この二七番歌では「手向草とは」、二八番歌では「玉ぐしの葉とは」とあるように、歌語の意味の説明が中心である。

そのことと、上で確認したように、同じ言葉もしくはその言葉から連想される言葉が使われている和歌が並んでいることを合わせ考えると、本書は、もともと何らかの和歌集があつてその注釈が施されたのではなく、歌語の説明のためにその語が用いられている和歌、つまり証歌が次々に連想され、集められて出来上がったものと言えよう。

三

では、本書は誰によって何のために作られたのか。

八九（71）侘しらぬましらな、きそ足引の山のかひ有けふにやはあらぬ（古今集 1067）

猿と一つ、ましらと一つ、百韻に二つの物なり。わびしらとは、わびしきといふ心也。山のかひとは山の間を云り。

九八（77）しらざりし我恋草や茂るらんきのふはかゝる袖の露かは（続千載 1033）

恋種のしげる、かるゝなど云へば、植物二句嫌也。わすれ草とは萱草を云也。^{●忘憂草ト云也}又べうしよにをふる草の事を云也。年をへてしげる程になれば其人の事を忘るゝと云り。

一〇六（85）暮ぬれば四方の草木を山風の己しほるゝ柴の袖垣（拾遺愚草員外・藤川百首 1590）

柴の袖がきとは、ひとのさし入口にちいさく垣をする事云也。塀などをもする也。袖がきとしたる句な

ど衣類になるべからず。

右の傍線部はいずれも連歌の式目についての指摘であるところから、連歌を詠む人に対しての注釈であることが分かる。そう思えば以下のような記述があるのも納得が行く。

二四、いそのかみふる川野べのも^{モト}と柏^{モト}もとの心は朽せざりけり（古今巻886）

もと柏とは又松のことを云也。さらに一に心得べからず。

一一二、さひた妻又うらわか身御芳野の霞がくれに雉子鳴なり（万代和歌集168）

さひた妻とは、若草の惣名也。諸草又ちいさければかくれ所なさに、雉子なども霞がくれになくとよめり。

又いたどりの事をも云也。歌に依て心替べき也。

五二、終夜枕なぐるる泪川あふ瀬にかゝれ夢のうき橋（出典不明）

夢のうき橋とは、心のかよふ事を云也。又源氏の夢のうき橋とは、源氏の威勢三国に陰れなき事どもも夢の様になると観念したる心をも云也。句によりて心持可替也。

被注歌での言葉の意味を説明した上で、「又」と別の意味を掲げ、意味は一つではないと説く。歌によって、句によって意味合いが変わってよいと指摘するのは、連歌を展開させるため、言葉の意味を別の意味に取りなして付けて行くことを促すことになる。本書は実際に連歌を詠もうとする人のために、連歌師が、連歌に用いる語の証歌を掲げ、実際の、具体的に解説したものであると考えられるのである。

四

『作意不審歌抄』を紹介した中川芳雄氏は、谷山本の二一四番、中川本では93番歌の注、

庭中にあすはの神のこしはたて行すゑいはふかへりくまでに（夫木抄160・万葉435）

あすはの神とハ、釜神之事也。こしはたとハ、あかい、を云也。其家人、旅などへゆく時、何事もなふまほり給へば、かまのかミをまつる也。其くうするあかい、を、こしはたと云也。（中川本による）

を引き、「こしはた」を「あかいひ（赤飯）」とする説などいささか奇説に近いものもあらうが、かにかくに、本抄各所に、或は珍、或は奇、或は妙変、端倪すべからざるていの解もある」と、本書の説の特異さを強調された。また、谷山氏も谷山本の九番歌の注、

九、ゆきてこそあすもさねこむ中／＼に遠かた人は心おくとも（源氏物語 薄雲・光源氏304）

さね来むとは、源中一の秘事也。宿木と書てさねこむとよませたり。（頭注）宿木^{サネコト}

を引き、「さね来む」を早く来るの意に解するのは、すでに紫明抄などにも見えるところだが、これを「宿木」に当てるといふのは、まさに独特の釈である」と解釈の特異さを指摘されている。

「さね来むとは、源中一の秘事也」とあるように、その特異さは、当時の秘事・秘説と関わつて産み出されたものであるらしい。第二章で取り挙げた二八の「玉ぐしの葉とは、松の事を云也」なども、常識的な意味とは違った解釈が示されていた。

また、被注歌に出典不明が少なくないこと、さらに、歌の本文自体が、正統的なテキストとは相当に異なるものがあることも、本書が都に於ける歌学的主流からは距離を置いたところで成立したものであることを物語つていよう。

〔翻刻凡例〕

- 一、京都女子大学図書館谷山文庫所蔵『にはたづみ』（谷山本）を底本とする。
- 一、翻字は原則として原本通りとする。但、以下の項目については改めたところがある。
- 一、旧字体・異体字・合字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、適宜、句読点・並列点を施し清濁を分かった。
- 一、割書部分は《》で括り示した。
- 一、和歌を示す朱の合点、朱引きは省略した。
- 一、判読不能箇所は、□で示した。
- 一、和歌には漢数字で番号を振り、そのすぐ下に、『作意不審歌抄』（中川本）に該当歌がある場合はその番号を洋数字で記し、該当歌がない場合は×印を付した。
- 一、和歌の下に出典注記を付した。検索は新編国歌大観によって行い、その番号を付した。
- 一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

〔翻刻〕

此一巻をにわたづみと名付侍る事は、西行上人の詠歌を巻頭として、八代集の内或は源氏等の秘歌どもを書頭註之畢。於懷中可為秘藏秘書と云々。

- 一（1）君もみよにはたづみにも秋の夜の月は隔るならひ有かは（出典不明）

縦タトヘばにわたづみとは、雨などの降たる時、庭にたまりたる濁水の事をいふ也。是にも日月は隔なく宿り給ひ

て、光を増給ふ物也。数ならぬ我等ごときの身にも、なさけましませと君にうつたゑてよめる歌也。又詩の心を以て読る也。其詩に曰、君見一夜滝泥水 不在清波月前泥 此詩の心也。(頭注) ●左傳、潢汗行潦之水トニワタツミ也。潢ハ字書ニ積水池。行潦ハ路上ノ流水。孟子朱註、行潦道上無源之水也。

二(3)

あげまきに長き契りを結びこめて同じ心によりもあわなん(源氏物語 総角653)
 ●^{見詩経}あげまきとは、七より十五迄のわらはべの事を云也。源氏のかおる大将、東屋の君に新枕の時読る歌也。又、具足のあげまきをも云ヘル間、句によりて心持かはる也。

三 ×

足引の山降水に陰みえてゑぐのわかかなを摘は誰がなぞ(出典不明)
 ゑぐのわかかななどは、正月七日に御門にそなへ奉るを云也。又茶のことをもゑぐと読る歌有。句体により候べき也。

四(2)

雪消ばゑぐの若菜も摘べきに春さへはれぬ太山辺のさと(金葉集三奏本9・詞花集5)
 前に同じ好忠の歌也。

五 ×

村雨のはれ間に出ていざ摘むとがの尾山の春の若草(出典不明)
 茶の事を若草と読る也。

六 ×

山鳥の尾上の茶の葉春の日にながくしくも摘暮す哉(出典不明)
 茶をつめる比は物寂しき物なるか。

七(4)

いつのまに神さびぬらんかぐ山のむ杉が本は苔のむすまで(万葉261・歌枕名寄2915・夫木抄13909)
 む杉とは、ちいさき杉の事也。又云杉のかしらのほこににたるをも云也。句によるべし。

八 ×

船とむる遠かた人になくはこそあす帰りこむせなと待みよ(源氏物語 薄雲303)

源氏薄雲に、源氏、紫の上のかたへおはしまして、あす帰りこむと口ずさみ給へば、紫の読給ふ歌也。扱こ
そ源氏のかへしの歌に。

九 × ゆきてこそあすもさねこむ中くゝに遠かた人は心おくとも（源氏物語 薄雲304）

さね来むとは、源中一の秘事也。宿木と書てさねこむとよませたり。（頭注）宿木^{サネギキ}

十 × けふよりは我をもちいのかゞみ草さかへさかふる陰ぞ久しき（梵灯庵袖下集5）

かゞみ草は四季に有。春は大根、夏は紅、秋は槿、冬は松也。四季の歌に、

一一 × 夏の庭水ためてみむかゞみ草ただ咲花の色はくれない（梵灯庵袖下集6）

すゑ摘花の事也。夏のかゞみ草也。

一二 × 朝顔のあだ成花のかゞみ草うつしとゝむる名残あれかし（梵灯庵袖下集7）

秋のかゞみ草也。

一三 × 冬の庭月も落葉のかゞみ草松の下ばぞしばらくもれる（梵灯庵袖下集8）

冬の鏡草也。

一四（5）萩が花ま袖にかけて高円の尾上の宮にひれふるや誰（新古今331）

真袖とは両方の袖をいふ也。巾振とはまねくといふ事也。新古今顕昭の歌也。

一五（7）水茎の岡のくず葉も色付ぬ今朝うらかなし秋の初風（新古今296）

水茎の岡は名所也。うらがなしとはあらあなしと驚きたる心也。

一六（8）五月雨は空をばれして時鳥時に鳴音は人もとがめず（新古今1044）

空おぼれとは、よくしれる事をそれはずれしてたまりたるやうの事也。

一七(9) 打ちはゑてくるしき物は人めのみ忍ぶの浦の海士のたく繩(新古今 1096)

打はへてとはいさとも云也。しのぶの浦は名所也。あまのたく繩とは、あみのうけなわを沖に引はへて磯にゐてたぐる事を云也。煙などを結びて、たく繩とあらば、塩に朽たる繩をひろげてたく事也。

一八(10) 白川のひがきのおふな年をへてみづはぐむ迄身は老にけり(後撰 1219)

水はぐむとは、年よりて腰と膝と一所によりてかゞみてあるを云也。檜垣の女とは、うら表にみへとをる程やせたる事を云也。

一九(11) あしの屋の賤はた帯のかた結び心やすくも打とくる哉(新古今 1164)

賤はた帯とは、布をる時腰にしまきと云繩をゆひ付るを云也。是は立居にはやくとけやすきやうに、かた結びにする物也。

二〇(12) 我恋はちぎのかたそぎかたくのみゆきあわで年のつもりぬる哉(新古今 1114)

ちぎのかたそぎとは、神のやしろの上に、ちぎ・かつを木とてすぐなる木を二つ打ちかへておく也。両のはし行あわず。それを我逢ぬ恋になずらへてよめる歌也。

二一(14) 玉柏葉しげりにけりなさみだれの葉もりの神もしめわぶる迄(新古今 230)

玉柏とは五月の比一切の草木わか葉みる／＼とうつくしくもへかさなるを云也。葉守の神とは、千草万木の葉を守る神也。あまりにしげりかさなれば、まもりあましたると云。新古今の歌也。

二二(14の注) 難波江のものにうづもる、玉柏あらはれてだに人を恋ばや(千載 641)

難波江のものの中にしろき石の玉に似たるを云也。浪のうてばあらはる、物也。そのごとくにをし出して、我もひとを恋なんと云歌也。

二三 (81) あふ事を水の柏にうらとへば沈に浮くは泪也けり (続古今 1290)

是は伊勢の二見の浦にて濱ゆふといふ物の葉に石を置いて、我おもふ事をうらなふ事を云也。我おもふ事か
のふべきにはうきてめぐる也。かのふまじきには則沈也。物こそしづめば我恋あふまじきとてなげく事也。
是は天照太神の御ちかひといふ也。

二四 (135) いそのかみふる川野べのもと柏^{モト}もとの心は朽せざりけり (古今 886)

もと柏とは又松のことを云也。さらに一に心得べからず。

二五 (137) 嵐吹遠山本の村がしは誰軒端より雪はろふらん (愚見抄 20)

村柏とは、北国にて大雪の降時、舟のろのはのごとく作りて、軒場に積りたる雪をはらひおとす物の事を
云也。

二六 × 花の散吉野、里に賤の緒は岩と柏をふみしだきつ、(出典不明)

是吉野などに、岩のかさなりたる柏のやうにあるを云也。葉広柏 詠柏 朝柏 夕柏とてさまざま侍る。

口伝。ひろ柏とは萩の事を云り。(頭注) ●^サ萩 側綾切葉草、又葉名生水中。

二七 (15) あふ事をけふ松がへの手向草幾世しおる、袖とかもみむ (新古今 1153)

手向草とは松の事を云り。千世み草とも、松也。

二八 (16) ぬれてほす玉ぐしの葉の露霜に天てる光幾世へぬらん (新古今 737)

玉ぐしの葉とは松の事を云也。中にも天照大神・八幡大菩薩の御愛木也。其俣神体にてまします也。

二九 × 深く入て神路の山を尋ば又上もなき嶺の松かけ (千載 1278)

神路山とは、伊勢の山田の山を云也。天照大神と申は則彼松にて侍る也。

三〇 × とへかしな玉ぐしの葉にみがくれてもずのくき目詠ならずとも（続古今 1759）

天照ひかりいく世経ぬらん
書ちがへ歟

三十一 × 是は又榊の事也。榊をも玉ぐしの葉と云なり。うたの趣によりて替る物也。
●万葉の哥 伯勞鳥
春さればもずの草ぐきみえず共我はみやらん君があたりを（玉葉 1609）

もずのくさぐきとは霞の事を云也。又鴈の蛙などをむばらの枝にさし置たるをも云也。時鳥のくさでとて鴈のさして置といふ。是秘する事共也。

三十二 (17) 敷たへの枕の上をすぎぬ也露を尋る秋の初風（新古今 295）

敷妙の枕とは馴たる枕也。又物思ふ時の枕とも云り。恋にかぎるべからず。

三十三 (18) とはるゝも嬉しくもなし此海をわたらぬ人のなげのなさは（後鳥羽院遠島百首 79）

なげの情とは、たゞ大かたにしたる偽の情也。後鳥羽院をきの国へまします時、都よりふみにてとひ奉し時、あそばしたるとなむ。

三十四 (19) よしあしの事な歎そ何事もさほな車の夢のうき世に（出典不明）

さをな事とは、絹布などをゝるひの事也。あれをとりまわす間の人間也。夢の間の人の一世にあまりになげきそと云こと也。あだ成たとへ也。（頭注）僻按、梭を投る間といふ事也。註謬。

三十五 (20) 人しれずはだゑにしむるいわた帯心づくしの月をこそまで（出典不明）

いわた帯とは、懷妊したる女の五月めよりおとこの帯を肌へにする事を云也。九ノ月の聞くるしめる事に
なずらへよめる歌也。

三十六 × 神も我を守れ鹿島の常陸帯たゞ一筋にちぎりそ（出典不明）

ひたち帯とは上の帯の事を云也。注に曰、ひたちのかしまの宮にて男にゑんのうすき女、また、女に縁の

うすき男、壬子の日、互の帯を結び合て宝殿のうちに三日置て三日めの日取出して、祢宜が一方の口を手の内に持てとらすれば、取て引逢たるを其俣夫婦と成と云也。

三七 (22) うばそくが行ふ道をするべにてこん世も深契たがふな (源氏物語 夕顔 30)

是は五条の夕顔の宿にて、隣の小屋にてみろく仏を唱て廻向するを聞給ひて、源氏の読給ふ歌也。うばそくとは、山卧などの事を云なり。又、源氏のうばそくとは源氏のおち宇治山に住給ふを云也。おとこのかみはそらで女ぼん肉ぢきをたちて行けるを云也。仏の弟子にもうばそくうばいとておほく侍りし也。うばいととは、びくに、はならで、女にてひじりきりたるを云り。五十六億七千万歳弥勒の出世迄ものちぎりをかけてよめる歌也。

三八 (23) もろかづら落葉を何にひろひけん名はむつまじきかざしなれども (源氏物語 若菜下 49)

もろかづらとは女の兄弟あるを云也。女三の宮を源氏てふあひ也。兄の落葉の宮をば柏木のゑもんが得て、女三の宮にも似ず、冷じかりし事を讀る也。名はむつまじきとは女三の宮のやうにも侍らねば、心うかりし事也。

三九 (27) 恋すれば我身は細くおとろえて二重が三重の帯と成迄 (出典不明)

帯は二重する物なれど、うき恋にやせたれば三重にもまはるべしと云也。かとのきぬとは、匂ひをとむる時、直にをけばとまらず也。あはひにへだてのきぬを置を、香とりのきぬといふ也。

四〇 (29) ほのかにも軒端の萩を結ばずは露のかごとを何にかけまし (源氏物語 夕顔 39)

かごととは、かこくつけの事也。源氏空蟬に思ひかけま、この軒端の萩を忍ぶ様にて、いよの介がもとへかよひ給ふ。軒端の萩はかくつけの事也。空蟬ゆへに中河へさいく通給ひしか共、空蟬終になびかず物

うかりし事どもとなり。

四一(28) おなじ野、露にやつる、藤袴哀をかけよかごと斗も(源氏物語 藤袴399)
前に同作意也。

四二(30) おもひ川絶ず流る、水の泡のうたかた人にあわで消めや(後撰515)

おもひ川とは、涙の事を云也。うたかた人とは、水の泡を云也。うたかた人とは、情深き人の事を云也。

四三(31) 我恋は海士の捨草徒らに朽まさり行袖を見せばや(出典不明)

海士の捨草とは、海士人の塩を焼て後に捨る灰の事を云也。何のやうにもたゞず、朽すたる物也。それを恋にならずらへてよめる也。

四四(32) わくらばにとふ人あらば須磨の浦^{ニイ}もしをたれつ、わぶとこたゑよ(古今962)

わくらばとは、稀にもと云心也。行平卿須磨に住給ひたる時の歌也。又わくらばとは、六月土用のうちに草木の葉の紅葉したるを云也。病葉と書てよませたり。(頭注) ●邦岡曰、呉融詩、五陵年少如相問 阿

対泉頭一布衣ト。此歌ニ似タリ。●又嬾^{ワカバ}葉^ト書ハ木ノ若葉也。●在原行平、仁和帝芹川行幸の時、おきな

さびの歌にて不吉に叡慮おほしめされ、翌年流^ニ須磨ノ浦^ニ。●後撰集抄・伊勢物語抄にみへたり。古今に田むらの御時、事^ニあたりて津の国須磨といふ所^ニこもり侍りけるに、宮の内に侍りける人^ニ遣しけるとて此歌あり。

四五(33) 春のよのやみはあやなし梅の花色こそみえねかやはかくる、(古今41)

匂ふ物、又はおとある物などはやみにも

雲カニセテ霞申候。

霞にもかくれぬ物也。あやなしとは無益と書てよませたり。

四六 (34) 山高み人もす^(ハミ)めぬ桜花いたくなわびそ我みはやさん (古今 50)

人もすさめぬとは、あいしとはぬ事也。みはやすとは、賞翫する事を云也。我賞翫せんと也。

四七 (35) 我がせこが衣のすそを吹かへし浦めづらしき秋の初風 (古今 171)

うらめづらしやと驚たる儀也。せこともせなとも、我妻の事を云也。

四八 (36) 山ざとにあらさまなる都人閑しとやみむ住うからぬを (三五記 139・桐火桶 182・正治初度百首 691)

あからさまとは、かりそめなる心也。

四九 (37) 難波めがすくもたく火の下こがれうへは里なき我身也けり (千載 665)

すくも焼とは、難波人などの芦の根をたく事を云也。ほのかにもみえず下にてこがる、物也。

五〇 (38) 秋たちて幾かのあらぬにこのねぬるあさけの風は袂すゝしも (拾遺 141)

このねぬるとは、そとまどろみたる事也。

いすりつきの水とは、びんたらひの水の事を云也。いきず玉とは、人の魂の事を云也。生霊と書てよませたり。

〇めわたる鳥とは生類にあらず。十二時の移り行事を云也。隙行駒とは、光陰の移り行事を云也。

〇日のねずみとは、今日のあすに移り行事を云也。

〇月のねずみとは、今月の来月にちや／＼とうつり行事を云也。

五一 (39) 物思へば隙行駒も忘られて落る泪やまづをそふらん (夫木 8026)

恋にとんじて光陰の移るをもわきまへぬと云歌也。

五二 (40) 終夜枕ながる、泪川あふ瀬にかゝれ夢のうき橋 (出典不明)

夢のうき橋とは、心のかよふ事を云也。又源氏の夢のうき橋とは、源氏の威勢三国に陰れなき事どもも夢の様なると観念したる心をも云也。句によりて心持可替也。

五三(41) 形見ぞと見れば思ひのふかみ草何中々の匂ひ成覧(新古今 768)

ふかみ草とは牡丹の異名也。

五四(42) 鴨頭草の花の心やかはるらん昨日にもにぬ袖の色哉(新後撰 1147)

つき草とは、露草の事を云也。色の移りやすき物也。秋百日の間花のちりては又咲くする物也。さればも、草とも、も、よ草とも云也。(頭注) ●鴨頭草、一ニ作ル鴨跖草ニ同。

五五(87) いで人はことの身ぞよきつき草のうつり心は色ことにして(古今 711)

前の歌に同じ。ことの身ぞよきとは、人はたゞ真言こそよけれ、うつりやすくて偽のお、きはわるきといふ心也。

五六(44) 花がたみみならぶ人の数多あればうとまれぬらん数ならぬ身は(古今 754)

花がたみとは、諸人の物を見る目のあまた有を云也。うとまれぬらんとは、捨らるべきと云心也。賞翫する人の多ければ、わがごとくのもの捨られべしと云心也。又、花をつむかこの事をも花かたみといへば一に心得べからず。さてこそめならぶとはよみけれ。歌道はか様なる心持肝要也。能々師伝尤也。

五七(43) 名もしるし嶺の嵐も雪と降山桜戸のあけぼのの空(新勅撰 94)

山桜戸とは、桜の多く繁りあひて戸を立まはしたる様にくらきを云也。

五八(45) 日の光やぶしわかねば磯のかみふりにし里に花も咲けり(古今 870)

やぶしわかねばとは、善悪をもわかぬといふ心也。主上の御事を讀たる歌也。

五九 (46) とめこかし桜盛なる我宿をうときも人は折にこそよれ (新古今 51)

とめこかしとは、もとめ来たれかしと念願の心(イ・イ)を。西行法師の歌也。

六〇 (47) あふことはいなといひつゝ、かほをふる水かけ草の露ならね共 (松下集 3173)

水かけ草とは、いねの事也。稲にみの入てふらめくは、人の物をいやと云てかをふるにたれば、たとへよめる也。又、水影草・露取草とはいもの事を云也。七夕の手向の歌をば、いもの葉の露を取てかく故也。

六一 × 七夕のと渡船の梶の葉に幾秋かきつ露のたまづさ (新古今 320)

七夕の歌を梶の葉七葉に七首書てながす物也。されば俊成卿の読る。新古今の歌也。

六二 (48) いとせめて恋しき時はむば玉のよるの衣をかへしてぞぬる (古今 554)

烏羽玉のよると云事は、昔此国にやたのからすとて、五尺有鳥の羽のうちに玉を持て、よるをてらしたる故に、烏羽玉とは読習はせり。いとせめて恋しきとは、切に人の恋しき事を云也。さやうの時は、我きぬを三度ふるふてさかさまに着て、双六ばんを枕にして歌をよみてねたれば、おもふ人にうつゝのごとくにあひみると云也。されば小町がうたも、かくのごとくよめり。古今集の歌也。口伝多し。(頭注) 按神書(シンショ)は怪異(クワイ)に似たる事あれども、或は已生(イミ)未生有形無形の伝へあり。専ら天ヲ云もの有り。専ら人を語るもの有り。人ヲ以て天を談じ、天を以て人をかたる。従来天人唯一の理之申旨、至て深し。文義を以て例する時は大に深意を害する也。故に豊玉姫を龍といひ、又は八咫鳥・無名雉などいふは禽鳥にあらず、人の事をいふ也。歌のことは二恋のなかだちを錦鳥といふ如し。只むば玉といふは、夜といわん枕詞乎。

六三 (49) 七夕にかさんとおもふあけごとに其よなき名の立にける哉 (金葉 157・千載 784)

あけごと、は仏神星などに物を手向事を云也。昔大裏にある女のうたをよみて七夕にたむけ侍りつれば、よ人に心かはすとして名の立たればよみたり。

六四(50) 旅人の蓑代衣^{ミシロ}ふる雪にふぎをわくる谷のかけはし(秋篠月清集 675)

みのしろ衣とは、雪あられの降時、みの、だいにきるかたびらの事を云り。

六五(96) 降雪にみのしろ衣打きつ、春来にけりとおどろかれぬる(後撰 1)

藤原敏行が正月踏歌の日、大雪ふりけるに、禁中より罷帰に主上より大褂^{オホカ}を下され候時よめる歌。大褂は男、小褂は女の装束の一の上に着せし也。

六六(51) おみ衣去年迄こそはならざらめけふの夕べをかけてだにとへ(新古今 1419)

をみ衣とは大口すいかんの事を云也。きると云不可。何時もかくると云也。

六七(53) 昔より人は住ずよ大江山鬼のしこ草たれながむらん(出典不明)

おにのしことは、紫苑の事也。大江山には酒天童子が住し故に、おにのしこ草とは読習はせり。

六八(54) くるとあくともかれぬ物を梅の花いつひとかたにうつろひぬらん(古今 45)

くるとあくとは、くるとあくると。めかれぬとは、物のその俣ある事也。又めかる、とは、物の遠く成事を云也。

六九 × かつしかのまゝの池水こほりゐてよがれがち成あちの村鳥(夫木抄 7023・歌枕名寄 434)

かつしかのまゝの池は、下総の名所也。あちむらお、き所也。よがるゝとは、よるゝ物の遠ざかる事を云也。

七〇(55) 月影はさへにけらしな神垣やよるべの水はつらゝるまで(夫木抄 125 57)

よるべの水とは、神前にて湯だてをまつる事也。又こりなどかく事をも云り。何れに神祇也。おぼしまめぐるも神祇也。神のこんかきを度々まうでする事をおぼしまめぐると云也。

七一 (56) 風まぜに雪は降つ、しかすがに霞たな引春は来にけり (新古今8)

しかすがにとは、しかもさすがにと云心也。しかすがのわたりは三川の名所也。

七二 (57) 露をだに今は形見の藤衣あだにも袖を吹嵐哉 (新古今789)

藤衣とはしよく糸の事を云也。秀能卿の父のかたみと見るに、袖の露を吹ちらすをかなしみて誦し歌也。

七三 (58) 取り^取つな^玉げた^{田横野ノ}まだよ^放野の^馬はなれ^驕駒^馬つ、^驕じの^馬けた^驕に^驕あ^驕せ^驕み^驕花^驕さ^驕く^驕 (夫木抄1008)

けたとはつ、じのゑだ也。五音相通也。つ、じは馬の葉也。あせみは馬の毒也。《●馬、馬^ア酔^セ木^ホの葉を食

て酔て死するとなり。故云レ尔。》

七四 (59) 我恋はふたみ替れる玉くしげいかにすれどもあふよしもなし (後葉集598)

玉くしげとは、くしなど入る箱也。ふたとみと別くなるはあはぬ物也。あわぬ恋になすらへ読る歌也。

又暁の異名をも玉くしげと云也。

七五 × 玉くしげ二見の浦の貝しげみ蒔絵に、たる松のむら立 (金葉集二度本544・井蛙抄432)

是は暁、伊勢の二見の浦の塩干に、いろくの貝のあらはれたるを、松の木の間より詠れば、さながら蒔

絵に似たるとは読し也。

七六 × 住吉の浜松がへを引結び身のさちあらばとけもやすらん (出典不明)

住吉の神のちかいにて、我思ふ事を松のみどりを結びてうらなへば、よろこびのは則とくると也。よろこび有まじきにはとけぬと云り。さちとはさいわいの事也。幸の字をよませたり。

七七(60) 渚は瀬に隙なく替る飛鳥川人の心の水ぞ流る、(秋篠月清集1524)

心の水とは、あだなるたとへにも云也。飛鳥川は渚は瀬と成、朝夕にかはる也。されば人のうつりかはる事にたとへて読し也。又泪の事をも心の水と云也。

七八(61) おしまれぬ身たにも世には有物をあなあやにくの人の心や(山家集116)

あやにくとは、物のうしろ違になる事を云へり。

七九(62) 起ふしに沈みもやらぬ川竹のよにためしなき名をやながさん(平家物語(寛一本)異本歌6)

河竹とは、うき草の事也。

八〇(63) きねごとを余り請けん社こそ果はなげきの森と成らめ(古今1055)

きねごと、は、仏神にしゐて祈^{●祈字か}祈念する事也。

八一(64) 奥山のをどろが下を踏分て道有世ぞと人に知らせん(新古今1635)

おどろとは、いばらの事也。いばらはすぢりまがりて物にかゝりてよこしま成物成れど、ふみ分れば道あると也。人間と生れ道をしらぬは非情の草木にも劣べきと思召て、後鳥羽院の御製也。

八二 × なをき木に枉れる枝も有物をけをふききづをいふぞわりなき(後撰集1155)

はかなきイ

いかにもすぐ成木にもまがれる枝も有物也。少のちがいないなど有とて人をいひかたむけんとするは、はかなきたとへによめる也。

八三(65) 婦人の袖打払ふ村雨に取やさなへの声もならず(夫木抄16594)

たをやめとは、五月田をうへて、うたをうたふ若き女共の事也。さをとめとも云り。(頭注) 婦人^{ツツヤメ}

八四 × 春くれば星の位に影見えて雲井の庭に出るたをやめ(玉葉3)

たをやめとは、禁中にて主上の当年の星を唱へさせ給ふ事也。是は大内のごたちなどのことを云なり。ごたちとは禁中の御下司女の事也。

八五(68) 春の夜のあけのそほ船ほのぐと幾山本を漕めぐる覧(続古今48)

あけのそほ船とは、天上人などの月見・花見等の時めさるゝかざりたる船の事也。

八六× 武士の八十字治川のあじろ木に紅葉をくだすあけのそほ船(玉葉824)

前のうたに同じ心也。

八七(69) 三吉野、きさ山かげにたてる松幾秋風にそなれきつらん(詞花110)

そなれ松とは、小松より庭などに植てそひなれたるを云也。又岩ほなどに立てそびへたるをも云り。

八八(70) あふみ成ゆる木の森の鷺すらも独はねじとあらそふ物を(古今六帖448)

ゆる木の森は名所也。鷺すらとは、鷺ともといふ心也。蝶すらともよめり。

八九(71) 侘しらぬましらな、きそ足引の山のかひ有けふにやはあらぬ(古今1067)

猿と一つ、ましらと一つ、百韻に二つの物なり。わびしらとは、わびしきといふ心也。山のかひとは山の

間を云り。

九〇(72) 伊豆出舟なひ風あらく成ぬ也本の浦はによする白波(夫木抄15806)

是は伊豆が崎より出る船の事也。又五手舟とは、ろを五てう立て五人して漕舟の事をも云也。

九一(73) 世中は常にもがもな渚こぐ蟹の小舟のつなでかなしも(新勅撰522)

常にもがなとは、あまのつりをたれあみを引、隙なく苦しむごとく、世のさまぐに透なき事をたとへよ

める也。又かなしもとは、おもしろき事にもよめる歌有。歌によるべき也。

九二 × 陸奥のいづくはあれどしおがまの浦漕舟の綱手悲しも（古今 1088）

かなしもとは、ゑもこらゑずおもしろき也。

九三 × おほけなくうき世の民におほふ哉わがたつ袖に墨染のそで（千載 1137）

慈円和尚にひゑの山の座主持せ給へと宜旨ありし時、座主に成らん事は及びなしと卑下の歌也。伝教大師の、阿のくたら三みやく三ぼたひの仏達我たつ袖に冥加あらせ給へ、と説給ふ歌をかた取読り。新古今に侍る。

九四（74）あし田鶴の独をくれて鳴声は雲の上まで聞へつがなん（古今 998）

あしたづとは、あしの中に住をいへ共、此歌は鶴は千年いける物也。九百歳斗の後は羽もおちて、足斗にてはしりありきて、雲ゐの友を恋しがりて鳴心をよみし也。

九五 × 陸奥のたけふの里に我ありとおやにはつげよ心あひのかぜ（夫木抄 7764）

心あひの風とは、北より南へ、南より北へ吹風にて侍る也。なか立風の事をも云り。

九六（76）たまきわるうき世忘て咲花のちらずは千代の野べのもろ人（拾遺愚草員外・藤川百首 1512）

たまきわるとは、命のきはまる事を云也。又物をほめたる詞にも云へる言葉也。

九七 × 池水の菱のうき葉にとひくれてはちすのうへにかはず鳴也（千載 203）

みふし草とは、ひしづるの事也。

九八（77）しらざりし我恋草や茂るらんきのふはかゝる袖の露かは（続千載 1033）

恋種のしげる、かるゝなど云へば、植物二句嫌也。わすれ草とは萱草を云也。又べうしよにをふる

草の事を云也。年をへてしげる程になれば其人の事を忘るゝと云り。（頭注）●古詩曰、去者日以疎、来

者日以親、出郭門直視、但見丘与墳、古墓墾為田、松栢摧為薪、白楊多悲風、瀟々愁殺人、思還故里間、欲歸道無因云々。又白氏文集曰、古墓何代人、不知姓与名、化作道傍土、年々春草生。

九九(78) おきなさび人などがめそかり衣けふ斗とぞ田鶴も鳴なる(後撰1067)

おきなさびとは、老人のわからかに装束きてみたる姿を云也。行平卿が八十三にて大鷹の鷹飼に出立給ひたる事也。此歌口伝。

一〇〇 × たが春といはもとすげのねのびして引間の野べの松の一しほ(未来記3)

岩もとすげとは、笠にぬふ菅の根とも云り。

一〇一(79) 霜がる、人の心のあさはかにたつみはこすげ根さへ朽めや(壬二集883)

こすげとは、た、みのおもてを織いの事を云なり。

一〇二(80) 朝日さす軒のたるひはとけながらなどかつら、のむすばふるらん(源氏物語 末摘花77)

たるひとは、つもりたる雪のそ、と消る事也。つららとは軒にさがりたる氷の事をいふ也。●氷柱

一〇三(82) 芳野川岩と柏をこす浪のときはかきはぞ我君の為(新後拾遺1534)

ときはかきはとは、常住不変なる事を云也。岩と柏とは、岩の重なりて柏に、たるを云也。年月をへても替らぬ物也。このごとくに君が代をいわめて読る歌也。新古今に。

一〇四(83) ならざかや児手柏の二おもてとにも角にもねぢけ人哉(万葉3858・夫木抄13960・梵灯庵袖下集101)

敗器花ト云モノ女郎花也

この手柏とは、女郎花の事を云也。ゆへは、藤原頼風と云もの、男山に女をたのめて置たりしが、朝家の奉公に隙なければ年をへて音信る、事もなし。此女、頼風を恨てついに身まかりける。其女の廟所へ頼風行て見れば、塚よりかの花生出たり。女の形見に取つかんとすれば、うらみ顔にてしばめり。立退

ば又もとのごとく咲出る也。故にふたおもてとは云り。ねじけ人とは、むつかしきにくげなる心也。佞人と書てよませたり。(頭注) 秀次関白の時、謡百十番せられしに、五山僧衆相国寺慈照院二聚ル。故事ドモ其家々へ尋らる。惣じて謡に作りしにかたちもなきやうなる偽多し。其内、小野頼風が女郎花の事、深草少将が小町に通ふ事あり。此兩人は公卿補任にもなし。

一〇五(84) 草の葉に露の命のかゝれるを月の鼠のさはがしき哉(奥義抄357・高光、俊頼髓脳・古今秘注抄も)

月のねずみとは、日月のうつり行事を云也。もろこしに有もの、広き野を行けるに、火つきて四方よりやけたる間、かの物かしこをみれば入江の渚有。此水に入てたすからんといらんとすれば、底にわにと云物口をあきてのまんとす。上よりはやける也。岸のひたいの草に取付てのがれんとすれば、又此くさのねを、くろき鼠と白き鼠と二して、草の根をかぶる也。此草のねのきれきれずが人の一生也。是を觀念して讀し歌也。白氏文集ノ詩の心也。○身觀岸額離根草、命論江頭不縹舟 是を以て一大事の因縁をさととり得ば、則仏果に至らんもの歟。月の鼠・日の鼠、生類にあらず。光陰のうつり行事を云り。(頭注) 右參云、月の鼠とは月の速に移るをいふ。日の鼠とは日の速にうつるをいふ。

一〇六(85) 暮ぬれば四方の草木を山風の己しほる、柴の袖垣(拾遺愚草員外・藤川百首1590)

柴の袖がきとは、ひとのさし入口にちいさく垣をする事云也。塀などをもする也。袖がきとしたる句など衣類になるべからず。

一〇七(86) ことづてむ都までもしさそはればあなしの風に迷ふ村雲(後鳥羽院遠島百首93)

あなしとは西の事也。

一〇八(88) 手もふれで月日経にけりしらま弓をきふしよるはいこそねられね(古今605)

しらま弓とは八日九日の月は弓に、たり。又廿一二日の月は、つるをかけたる弓に、たり。然ども人の手にふる、事はなければ、なる、事はしらま弓と云のべたる歌也。

一〇九(89) いで我を人などがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふ比ぞ(古今508)

ゆたのたゆたとは、舟にたまりたる水の事也。舟ことばには、ゆと云也。殊更大舟などにたまりたるは夥敷也。手のたゆむ程汲事になぞらへて、我物おもひ隙なきにたとへ読る心也。いでは是の字をよませたり。

一一〇(90) あふ坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君が往来をなくもみめ(古今740)

四景の祭とは、禁中にある事也。四方の御門に庭鳥を置かる、也。此鳥鳴まじき^{にイ}鳴たるをながさる、也。北東に鳴たるをば、祇園のゆふしでを付て、逢坂・鈴鹿の関へながさる、也。西南に鳴たるをば、加茂のしでを付て須磨・竜田^{立イ}へながさる、也。ゆふしでを付る故に、ゆふつけ鳥とは云り。

一一一× 立田山夕つけ鳥やうとふ鳥くれないこぼす木々の下露(松下集2142)

木にとまらば紅葉の露をこぼすは、全体うとふ鳥の血の泪をこぼすにたりと読る歌也。

一二二(91) さひた妻又うらわか身御芳野の霞がくれに雉子鳴なり(梵灯庵袖下集9)

さひた妻とは、若草の惣名也。諸草又ちいさければかくれ所なきに、雉子なども霞がくれになくとよめり。又いたどりの事をも云也。歌に依て心替べき也。

一二三(92) 相思ふ春の野にあるさひたつま人には忍ぶ名こそ惜けれ(梵灯庵袖下集10)

●^{虎杖} 是はいたどり也。

一二四(93) 庭中にあすわの神のこしは立行末いはふ帰り来までに(夫木抄16051)

あすはの神とは、かまの神の事也。こしとは、かまの神を祭る時の赤飯の事を云也。其家の内より旅に立時、何事もなふ頼而かへし給はれとて祭て出る事也。

一一五 × 木づたへばおのが羽風に散物を誰にお、せてこら鳴覧（古今109）

鶯、巳が桜の花などにたはぶる、羽風にちるをば、誰がちらすかとおほく鳴らんと也。こ、ら鳴とは、おほく鳴事也。こ、らの年をと云も多くの年と云事也。鶯にかぎらず。

一二六（94） 里遠き板井の清水我門に人しくまねばみ草ゐにけり（古今1079）

板井とは板などにて結構にかざりたる井の事也。三草はうき草也。

一二七 × 人にあはんつきのなきには終夜むねはしり火に心やけをる（古今1030）

物のつきなきと云事を月になぞらへ読し也。つきなきとは便もなきと云心にも通べき詞也。古今の誹諧、
 躰の歌也。

一二八 × 武士の矢なみつくろふこての上にあられたばしるなすのしのはら（金槐集348）

是は正月踏歌也。だう歌をあらればしりと歌・連歌には用也。正月十四日・十六日両日也。前の段に是を注也。

一二九 × ひとは来ぬ桜は匂ひやくばるらん（出典不明）

近來都にての発句也。きぬくばりは春也。禁中にて正月初子の日、その位によりて小袖を下し給ふをきぬくばりと云り。是を源氏にひかれたる事は、紫の上の三のうらみのうちに入たり。たとへば紫の上には、いつもあけのきぬをまいらせ給ひたりければ、気かけ給ひての恨也。二には絵の恨。是は源氏須磨明石へまします時、あたりの景氣を遊し置れたる絵どもの有けるを、終に紫の上に見せ申させ給はで、

大裏にて絵合の有ける時、始て取出させ給へば深御恨也。三にはことの恨とは、伊与の介が所へ遣水はしらせ侍るを御らんじにいらせ給ふて、伊与の介が娘に琴を引かせて琴を枕にうた、ねし給ふときかせ給ひての恨也。三つの恨は源中秘事也。

一二〇(97) 春雨のしく／＼ふれば稲むしろ庭にもたる、青柳の糸(拾遺愚草8・六華集63)

しく／＼ふるとは、日を経ての霖雨の事也。細雨とも云也。詩にも、細雨灑^ツ衣見^ミ不^レ見 閑・花落^テレ地^ニ聞^ミ無^シ聲。春雨の目にはみえでこまかにふるに、そとに立てをれば衣しほとぬる、事を云也。

一二一(98) 東屋のこやのかり寝のかやむしろしく／＼ほさぬ春雨ぞ降(拾遺愚草109)

あやしき賤などが子を持て、夜はしとをしかけてぬれたるをほさんとすれば、けふも／＼とふる雨の物さびしき事をおしはかりてよめる歌也。世上のかんべん肝要の事也。

一二二(99) 渡^{スガル}鹿鳴秋の萩原朝立て旅行人をいつとかまたん(古今366)

鹿と一、すごると一、かのこと一、百韵に三つの物なり。かのこは夏也。

一二三(100) 人やりの道ならなくにおほかたはゆきうしといひていざ帰りなん(古今388)

人やりの道とは、人のつかひなどに行道の事也。

一二四(101) 朝なきにみべき君とし契らねば思ひ立ぬる草枕哉(古今376)

朝なきとは、常住にみるべき君にてもなければ、立ぬるとはよめる也。又あさのしづかなる事をも云なり。

一二五(102) こりずまに亦もうき名は立ぬべし人にくからぬ世にしすまねば(古今631)

こりずまとは、まへに人に契て長へてはなれたるが、すてず、又立帰て思ふ事を云也。

一二六 (103) 恋しくはしたにを思へ紫のねずりの衣色にいづなゆめ (古今 652)

紫のねずりの衣とは、根をくだきて染れば也。したにを思へとは、したぎの事也。むかし昔紫イの小袖を下にきて、上に白きねり衣をかさねて女とねて侍れば、ねいきのあがりて、自ねり紫に染りければ、あらはれて名の立し也。それよりしたにをおもへとは読習はせり。ゆめとは努々と物をちんずる事也。夢と云事にはあらず。

一二七 × かぞふればことしの雪はしらめども雪かくほどのいとなみもなし (夫木抄 7617)

雪月花などをいとなむとは、面白がりもてあそぶ事を云也。源氏に、橘の雪を払いとなむとは、橘の雪に、たるを翫事をいふ。

一二八 (104) 東路の道のはてなるひたち帯かごと斗りもあはんとぞ思ふ (新古今 1052)

此うたに同じ歌を前に注し侍る也。

一二九 (105) 山川の音にのみきく百敷をみをはやながらみるよしも哉 (古今 1000)

みをはやながらとは、其俣ながらと云事也。百敷とは、禁中に百官をおこなはる、御座敷の事也。

一三〇 (106) うちつけに物ぞかなしき木葉ちる秋の初をけふとおもへば (後撰 218)

うちつけとは、やがてと云事也。

一三一 (107) なよ竹のよなが上に初霜のをきゐて物をおもふ比かな (古今 993)

なよ竹とは、いかにもよはひながくうつくしきを云なり。

一三二 (108) 霜八度をけどかれせぬ榊葉は立さかへべき神のきねかも (古今 1075)

霜は一夜に八度宛ふる物なれば、雪上の霜と云事習侍る也。歌などに大事成べし。

一三三 (109) 最上川上れば下るいな舟のいなにはあらず此月ばかり (古今 1092)

もがみ川は奥州の名所也。いなにはとは、いやにてはなしと云心也。舟の漕ちがふ時はおもてをふる也。人の物をいやと云て顔をふるに、たる也。この月ばかりとは、最上は稲を、き所にて待れば、九十日の間は隙なく稲をつみかよへば也。又云、此川瀬はやき川にて舟をのぼするにかぶりをふれば如右よみし也。

一三四 (111) 雲しらぬ雨にもぬる、枕哉みかさの山を余所にきつ、も (後撰 715)

雲しらぬ雨とは泪の事也。三笠の山は名所也。

一三五 (112) 我たのむ人のおもひをてらすとて浮世に残る三つの灯 (続古今 686)

三の灯とは、夜前にあらず。稲荷大明神の宮に三光の玉をうずまれたる也。彼明神御うた也。

一三六 (113) 山がつの庵りにたけるしばくもこととひこなんこふるさと人 (源氏物語 須磨 208)

しばくとはさいくと云事を山がつのしばになずらへてよめる歌也。

一三七 (114) さきだ、ぬくゐの八千度かなしきは流る、水の帰りこぬかな (古今 837)

八千度くひしたる事也。旧語にも後悔無甲斐、典薬も難治物也と云々。人毎に可思事也。

一三八 (115) 五月雨の空もとどろに時鳥何をうしとか夜たゞ鳴覧 (古今集 160)

夜たゞ鳴とは、終夜なく事を云也。人にも有べし。

一三九 (116) 山里にとひくる人のことの葉はこの住居こそうらしやましけれ (新古今 1761)

こと草とは、^{葉イ}かねて人の物をいひ置詞等也。

一四〇 (117) 奥山のふするの床やあれぬらんかるもまたえぬ雪のしばく (夫木抄 129 43)

ふすいの床とは猪のある所を云也。かるもとは、木の枝などをくわへよせて猪のおのが有所を捨て、寒中を暮す事を云り。

一四一(118) つくぐと寢覚てきけばさとかぐらかごとがましき世にこそ有けれ(夫木抄 7479)

里かぐらとは、賤のめなどが夜うすなどを引て歌をうたふ事也。かごとがましきとは、かしましき事を云也。

一四二(119) 古のとよのあかりに見し人の猶面影のしみて恋しき(新古今 1004)

とよのあかりとは、大裳会の御事也。主上の御即位ある事也。豊のあかりとは冬也。霜月にあれば也。

一四三(120) 夜や寒き衣や薄きかたそぎのゆきあひの間より霜や置らん(新古今 1855)

かたそぎとは神のやしろにかぎる事也。一方はひきく、一方はたかくする物也。中にもすみよしにかぎりたる事也。住吉大明神の御歌也。

一四四 × 水鳥の足に引る、ねぬなわ、人もかまへぬく、り也けり(夫木抄 7035)

ねぬなわとは、ふるきぬまのそこに有ひしづるの根の事也。ぬなわとも、ねぬなわとも。人にしられぬなど、云事に用侍詞也。

一四五(125) 五月雨はまやのあまりの雨そ、ぎあまり有迄ぬる、袖哉(新古今 1492)

まやのあまりとは、大ひさしなどかけたる家は軒端もひろし。それにも我袖はぬる、とは、あまりある恋にとんじたる心をよめる也。

一四六(126) 時しもあれ田面の雁の別さへ花ちる比のみよしの、山(新古今 121)

時しあれとは、物の二も三もかさなりたる事を云也。

一四七 (128) 独ねは玉の台も何ならずはいりのこやに二人かもねん (出典不明)

はいりのこやとは、かゞみてはい入ほどの小家也。それにもおもふ人と二人あらばたんの成べしと也。いか成玉楼金殿たり共独居て物思はし悲しかるべきと也。尤思慮たるうた也。

一四八 (130) 清滝の滝の白糸くりためて山分衣をりてきましを (古今 925)

山分衣とはほうゑなどの事を云也。醍醐の清龍寺の事をよめる歌也。又山がつなどのきる浅ましきつゞれの事をも云也。歌に依て心持替べき也。

一四九 (131) やよ時雨物思ふ袖のなかりせばこの葉の後は何を染まし (新古今 580)

やよ時雨とは、時雨やいとよびむかへたる事也。

一五〇 (132) あふ坂の中ふみわくるかち人のわたれどぬれぬ花の白なみ (新勅撰 97)

かち人のわたれどぬれぬとは、縁のあさき人にたとへよめる也。江・川などもあさきをばかちわたりといへり。

一五一 (133) みさむらひみかさともふせ宮城野、この下露は雨にまされり (古今 1091)

御侍とは、かせ物やい、御笠めせと申せど、云事也。宮城野、露は雨よりもふかしと云義也。

一五二 (134) 夜もあけばきつにはめなでくだかけのまだきになきてせなをやりつる (伊勢物語 36段)

くだかけとは、家の庭鳥と云義也。まだきとは、はやく鳴て我おもひ妻をとく返したるがにくければ、夜もあけばかならず狐にくわせべき云事也。庭鳥は狐がすきてくいたがる物なればかくよめる也。せなとは、我妻の事也。はめなでとは、狐にくわすべしと云事也。

一五三 (136) 今さらに雪ふらめやはかげろふのもゆる春日と成にし物を (新古今 21)

かげろふのもゆるとは、春一切の草どものもゑ出ることを云也。又只かげろふとすれば、とんぼうのこ
と也。とんぼうをあきつむしともあきつはとも云也。日本国開闢の始、東方よりわき出る虫也。則秋津
島の形成虫也。珍重成もの也。穴賢メケ。

元龜二年《辛未》卯月日書之 藤原朝臣 (晴右)

于時寛文式《壬寅》十一月吉日

三拾六枚

成從

(以下、卷末37丁裏の書き入れ。本文と同筆)

一 うたのとめの事

けん、なん、せん、いづくにてもくるしからず。

ぞ、ける、こそ、けれ

いつ いづれ いく なに いか に など か や 一首の内にこのもしなければ、らんとはぬる事ならず。

一 ほうし・ほつしのわけの事

たとへば、じやくれんとはね候へば、ほつしとつめてよし。

たとへば、さいぎやうとよみながせば、ほうしといふ。

たとへば、どうよといふごとくにても、ほうし也。

一 あそん、あつそんの事

歌人はあそんよし。平人さむらいなどはあつそんよし。

歌には何にてもあそんよし。

〔付記〕

本稿は、赤石ひろこが二〇一八年度に本学に提出した卒業論文「和歌注釈書『にはたづみ』考」に付された資料編「『にはたづみ』翻刻と出典」における出典調査に基づき、今回大谷が全体を見直し、解題と翻刻として書き改めたものである。